

一般演題（口演）

2025年11月15日(土) 9:20～10:10 第5会場

[O14] 一般演題（口演） 14 転移・再発1

座長：川原 聖佳子(長岡中央総合病院消化器病センター外科), 原 聖佳(春日部市立医療センター外科)

[O14-3] 大腸癌大動脈周囲リンパ節転移の切除適応の最適化を目指して

北原 拓哉, 大内 晶, 小森 康司, 木下 敬史, 佐藤 雄介, 安岡 宏展, 安藤 秀一郎 (愛知県がんセンター消化器外科部)

【背景】大腸癌大動脈周囲リンパ節転移（PALNM）に対する外科切除は一定の治療効果をもたらす一方、切除後の転帰が不良な患者も少なくない。

【目的】大腸癌PALNMに対する外科切除後の予後因子を検討する。

【対象および方法】2006年から2024年に当院で大腸癌孤立性（他遠隔転移を有さない）PALNMに対して外科切除を施行した患者を対象とし、OS・RFS・リンパ節再発の予後因子を検討した。

【結果】対象患者は36例で、年齢中央値は63歳、男性が18例(50.0%)。時制は同時性/異時性が18/18例、深達度はcT1-3/cT4が20/16例。臨床的(c)PALNM個数は1個/2個/3個以上が11/7/17例。cPALNM径は10mm未満/10-15mm/15mm以上が5/20/10例であった。術前化学療法を15例(41.7%)、術後化学療法を29例(80.1%)に施行した。対象の5年OSは57.9%、5年RFSは39.4%、5年リンパ節再発率は47.1%であった。OSの単変量解析では3個以上（HR (95%CI) 4.27 (1.16-15.82), P=0.03）、同時性転移（HR (95%CI) 3.32(1.01-10.88), P=0.047）が有意に予後不良であった。RFSでは15mm未満（HR (95%CI) 4.02(1.16-13.89), P=0.029）が有意に予後不良で、リンパ節再発ではcT1-3（HR (95%CI) 3.70(1.02-13.33), P=0.046）が有意に予後不良であった。

【考察】PALNM切除の治療成績は未だ不良である。特に小リンパ節が多発する症例において、集学的治療による治療成績の向上が望まれる。